

いれずみとうた

「入墨淘汰」

野滝 希

【内容】

芝居というのは役者に偽物の人生を演じさせる。そのことにより役者は、自分の本当の人生を忘れてしまうことがある。ここでは劇場を海に見立て、舞台にまつわる言語を海にまつわる言語として置き換え、虚構とメタ的な現実を織り交ぜ進行していく。

寂しい女優「銀子」は、ある日芝居を覗くことを趣味とする「覗き男」と出会う。しかし覗き男にはこの世でたった一人人生を覗けない男がいた。それが流れの役者「淘汰」人呼んで「入墨淘汰」。銀子は、劇場が海であるなら、それを渡る淘汰は入墨鯨であるとし、銀子はその芝居鯨を狩る刃刺し（はざし）の役を申し出る。

脚本家も演出家も不在となった舞台で、主人の座を狙う裏方たちと淘汰の確執。淘汰と裏方たちによる劇の主人の行方とは？文学と演劇とはなにか？メタフィジカル的な視点から芝居を解体していく。

【概要】

とにかく、自由に思い思いに演じてほしいと作った戯曲です。

『役者のための航海術』とテーマを考えております。この戯曲は、観客のため、というよりはむしろ役者のために書かれたものです。役者の想像力に賭けた作品です。

作品内で、「水」を用いる演出のト書きがありますが、昨今の劇場事情を考えると難しいと思い、「水の音」にしてあります。

【登場人物】

入墨淘汰	入墨まみれの役者
市岡銀子	女優の役
白紙男・神父	自分の名前を忘れてしまった男の役・教会の神父の役
贗作男	自分の肉体が自分のものに思えない男の役
夜子・娘	高級娼婦の役・教会の修道女の役
覗き男	実は逮捕歴がある観客の役
衣装女・黒服	ミシンより手縫い派
大道具男・黒服	人を呪わば穴二つ
美術男・黒服	シーソーを演じる
照明女・黒服	星を占う
音響女・黒服	スピーカーをゆりかごに乗せて
キヤーキヤーガールズ（女1、女2、女3、女4）	

【設定】

舞台設定は現代ではないが遠く昔でもない。
抽象的で黒塗りのトタン板。

第一幕 白紙男と贗作男

青色の華やかな照明の中、銚を中くらいに構えた銀子（歳20代、女優）が立っている。深海のような穏やかなBGMが流れている。

銀子 私がこのお話をするのは、これが最後でしょう。思い出して下さい、思い出せるなら。星の降る夜でした。かけずりまわって涙を売って、歴史は南に、仏は右に。オレンジ左手に風なびかせて、きかせてください、あたしの言葉を。あたしの言葉は波で、言語がカモメとなって海を渡ります。あたしの肉体は海底の貝殻で、ほとぼしる血脈は海溝の活火山……。いいえ、難しい話ではないのよ。例え話でも、おとぎ話でもありません。劇場は【海】だということをお伝えしたいのです

銀子、きらきらとした目をして語り続ける。

銀子 劇場を海だと見立てると、役者などは海に生きる者でありましょう。しかしその男はまさに、表現すると大鯨でした。劇場を右から左へ、上から下へ、縦横無尽に駆け巡ったものです。その男、もとい鯨は体中入墨まみれで、尾鰭は立派に弓なりに反り、吠え上げる声なども月夜に美しく照り映え、見る者すべてを圧倒させていました。芝居鯨は劇場をどんどか荒鳴り渡って、その咆哮は起承転結をも飲み込み、台本までも海水に湿らせ、青々と輝いていたのです。なんて、これはそんな芝居のことです…

暗転。深海の穏やかなBGM消えてゆき、一つ波の音。銚が一つ落ちている。明転すると二人の男が舞台上に。

白紙男 どなたか！僕の名前を知りませんか。僕は自分の名前を思い出せません。ある日、言葉を空中に指で書いてみました。（空中に書く動作）でも、僕が、僕である言葉だけが見つからなかった！

贗作男 だれか！俺の身体を知らないか。俺は自分のこの身体が、自分の物であると思えないんだ。…ある日、自分の身体を思いっきり包丁で刺してみた。（刺す動作をしながら）でも、俺の体から血は一滴も出なかった！

ピューと汽笛の音が鳴る。静寂、そして見合う。

白紙男 …あなたは自分の身体が、自分の物に思えないんですか。まるで偽物、贗作だ

贗作男 お前は自分の名前が思い出せないのか。まるでまっしろ、白紙だ…。（気を取り直して）なにか、こうなっちゃった原因があるに違いない。お前はどうか

白紙男 さあ…でも自分の職業なら思い出せます。僕は役者なんです。たくさんの役を演じてきました。外科医やら集金男、銀行員に刃刺し（はざし）…

贗作男 刃刺し？

白紙男 ええ、鯨捕りの漁師のことです。そうそう、刃刺しの役は大変でした。なんせ役作りのために本当に鯨漁を体験してきました

照明、青。ざああつと荒波の音が聴こえる。鯨の鳴き声。

白紙男、銚を拾って

白紙男 ほら、これが鯨を刺す銚です。僕が乗った船、あれは3番船だったかな。執刀が乗っていた。艦押（ともおし）が艦艙（ともろ）をうけもち、取付（とりつけ）という雑用の少年が脇艙（わきろ）をになっていました。海は荒海で、僕は酔ってしまいました

また鯨の背が海面をたたく音がする。ざああつと海鳴る。

青照明が映える。

白紙男 …大きな背美（せみ）鯨に刃刺たちが踊るように刃を刺す姿は、忘れられません。舞台上の上でも、吐き気とともに胸の奥底から海つぱだの荒れた鯨刺し男たちと美しい鯨の光景がせりあがってきました。…結局セリフをかなり忘れて初日を終えました。でも、それらしい言い訳はできませんでした。舞台のトタン板の上で鯨に刃を刺していたら酔ってしまった、なんていっても信じてもらえませんか

贗作男 そうだそうだな。それから俺の話だよ。俺の身体が偽物だつていう話だ

白紙男 そうだそうだ。…じゃあ、僕と同じように、自分の職業なんかを思い出してみればいい。なにか事実めいた鍵が見つかるかもしれません

贗作男にスポット

贗作男 実はな、奇遇にも俺も役者だったんだ。そうそう、一番最後に演じたのは、反戦家の左翼学生だった。ロマンチックな文学部青年。愛読書は太宰治、好きな花は桃の花。ある日、アンチドラッグ風潮によって突如起こった、言われのないエレキ封鎖社会に反感を覚えた青年は新宿の、小さな映画館の、ピンク映画のレイトショーの途中、暗闇に懐中電灯で光をともした！

びいー、びいー、びいーと笛の音が多数反響する。

赤照明、贗作男は学生帽をかぶり手に懐中電灯を持っている。

贗作男 こんな風に。役作りのために、実際に映画館に赴いて暗闇に光を灯してみた。するとそれが、自分へのスポットライトのように錯覚したんだ。すぐお縄にかかったけどさ

白紙男 うわあ、おつかねえ人だったんだな

贗作男 こんなのは演じた役の性格さ！本当の俺はもつと穏やかなんだ…（学生帽外す）

白紙男 自分の肉体が、自分じゃない誰かのように感じるってことでしょか

贗作男 そうだ。でもやはり、生まれたからには自分のホントの肉体を手に入れたいと思うのは仕方がないことだからな

白紙男 自分の本当の肉体……。あ（目を抑えて）、なんということだ

贗作男 どうした

白紙男 自分の名前を忘れるようになってからというもの、視力が悪くなっているんです

贗作男 そりゃあ、難儀だ

白紙男 そういや、名前をなくす前、最後に演じたのは盲（めくら）の少年だった……（豹変して）

「それだよ。眼は《まなこ》か《め》か、それとも《めのたま》とよぶべきか、はたま
た《肉体の映写機》と呼ぶべきか、君はどう思う？」

贗作男 難しくてパンの耳こねくり回してるみたいだ

白紙男 確かそんな時のセリフですよ……

その時美しい音楽とともにチャイナドレスをまとった女たちが出てくる。中心は夜子。

女たち、夜子を中心に思い思いのポーズをとって

女1 愛する人に

女2 あたしの気持ちは分からない

女3 上海朝日の

女4 売れない娼婦

女5 愛する人に

女1 涙をひとグラス

女2 頭のいい男はイヤ

女3 背の高い男はイヤ

女4 女を金で買おうとする男も

女5 名家の出の男もイヤ

女1 だって

女2 女を付属品としか見ないし

女3 買いかぶってバカにしたり

女4 ドレイにしたりするからね

女5 愛する人に

女1 名前はいらない

女2 姓名占いの

女3 余白の子

女4 文字数が悪くて

女5 縁も悪い

女1 頭も悪けりゃ

女2 前世も悪い

女3 そんな男が

女全員 あたしは好き（くすくすと笑う）

夜子、優雅に踊るが左手を常に中ぐらいに掲げている。しかしギクシヤクと、明らかに他の女たちとは違う動きを見せる女が一人いる。ビン底メガネのダサイ女。

贗作男 おい、見ろよ。夜子さんだ。高級娼婦のご令嬢。今日も美しいなあ。ああ、目が見えなくなってるのか……。わかった、よし。少しでも俺と目玉を交換しよう

白紙男 え、いいんですか

贗作男 ありやあ、いい女だよ。いい女は仲良く眺めるものだ

白紙男 へ、へえ、俄然興味あります

贗作男 グラマラスでセクシー

白紙男 お言葉に甘えて束の間お願いします！

ビン底女が群れから離れて台本を取り出し読む。

ビン底女 ええと、ト書き。贗作男、透明のチューブ管を取り出し、白紙男の右目と自分の右目

をつなぐ。白紙男ががみ、上から贗作男が目玉を放り込む

贗作男 (その通りに動く) それっ、次は左目だ

ビン底女

はいはい。(めくって) 夜子、美しく舞っている。まるで聖母マリアンナのよう。周りの女たち、恍惚とした憧憬の眼差しを向けている。なんでしょ。随分文学的で分かりにくいト書きだこと。そのうち贗作男、俺にも見せろとゆする。白紙男、もうちょっとだけ、と返さない。もめ始める

役者たち、ビン底女の言葉通りに動く。

女3 夜子さま、どうしていつも左手を掲げて踊っていらっしゃるの？

夜子 知りたい？

女たち 知りたい (期待に胸膨らませ)

夜子 いつかこの左手を、下から優しく持ち上げてくださる男性が現れるのを待っているんです。いつ現れるか分からないので、こうやって踊っている間も手を掲げているのですよ。はあ、早くこの左手にふさわしい方が現れないかしら…

女1 いくらなんだって夜子さまったら

女3 お食事の間も

女4 お風呂の間も

女2 寝ている間も

女たち 手を掲げていらっしゃるじゃありませんか

くすくすくすと笑い、再び踊りだす。

後ろで争っていた白紙男と贗作男が前に出てきて争い始める。ふとした瞬間、白紙男の右手が夜子の左手をつかむ。

夜子 …やっと現れた。私の愛する人

白紙男 でも僕には名前がないんです。誰かを愛する事なんてできません

夜子 愛する人に名前はいらぬ。姓名占いを気にすることないんですもの

白紙男 では、本当に僕のこと愛してくださいませんか？

贗作男 よかったじゃないか、君の問題は早くも解決した

白紙男 なんだか突飛で跳躍的な氣もします

贗作男 その目玉はお祝いだ。君にあげよう。せつかく男どもの憧れ、夜子さんを手に入れたんだ。盲でどうする

白紙男 本当ですか！この御恩は決して忘れません。忘れせんとも！（握手して静止）

ビン底女、気が付くように正面を向き

ビン底女 紹介遅れました。いらつしゃいませ、皆様。お手洗いなどは大丈夫でしょうか。寝てる人はいませんか。隣の人が寝ていたら叩き起こして下さいね。さあ、このお芝居は『入墨淘汰』、『舞台』を海に見立てた生きる「役者の肉体」の反乱。一体どんなお芝居になるんでしょう！

急転、勇ましい雰囲気の中バツと暗転。場転中の役者たちのせわしない怒号に近い台詞が聞こえてくる。（※1参照）

役者1 彼は云う。外部的自然主義の演出法も、心理学的自然主義の演出法も共に舞台上の価値を創造する事はできない

役者2 第一の主義即ち表面上の自然主義は俳優を人間の感情の外見的現象の技巧的模倣、すなわち役者自身のでない、他の人によってなされた精神的経験の結果の模倣へと導いて行く

役者3 次のいわゆる心理学的演出法は真実な生きた経験を理屈張った模倣に変えてしまう

役者4 それは理詰め分析によって発見した心理学的感情を如何に賢く表現するかを教える

役者5 それは経験の理論的流れを如何に巧にまとめるかを教える

役者6 そして脚本に入り込んで得た役者自身の性格描写の代りとして世俗的非芸術的な、色彩の無い役者自身の経験が作者を犯してでしゃばるのである

バン、と明転。すると役者総員が中央で集まってポージング。

役者1 ミネロイツ・ダンチエンコによる作者の精神！

役者2 ひとつ！

役者たち 定まった手順とか文学的形式とかいうものから舞台を解放する事

役者3 ふたつ！

役者たち 生命ある心理学と単純な談話を舞台に戻す事

役者4 みつつ！

役者たち 高頂に達した時どん底に墜ちた時のみによって人生を研究せず我々をめぐる日常生活を通じて調べる事

役者5 よつつ！

役者たち 特殊の名人のためにと長年演じられずにある例外の脚本に真実の芝居求めずして、
隠れた内部の心理的生活の内に求める事

役者6 いつつ！

役者たち チエエホフの芸術は芸術的自由と真実の芸術である

しばらくおどろおどろしい音の中ポーシング、暗転。

※1：ここから先の文章は「築地小劇場」創刊号（大正13年6月13日／築地小劇場発行）より一部引用しました。

第二幕 淘汰、登場

暗黒のBGM。ピン底女が衣装を変え銀子としている。しかし舞台上に第一幕のハケ忘れである刃刺しの銚がひとつ落ちていた。

銀子 (メガネを外すのに手間取って) よしよし…、転換が早くて明転に間に合わなかった。

まったく、役者不足のこのお芝居はこれだから。(身なりを整え)おっけい。おっけい、ああ!(銚を拾う)ああ、一幕の銚が!こんなところにハケ忘れて転がつてるじゃないかあ!誰だい、これハケる奴!

賈作男役者 (袖から出てきて)すみません、僕です

銀子 すみませんで済みません!

賈作男役者 暗転中なんも見えなくて(へこへこ)

銀子 (素っぽく叱り続ける)(しかし止まって)…と銀子、台本に書かれたセリフを読む。

このお芝居は奇想天外です。何がアドリブで何が脚本か、何が現実で何が虚構か、皆さんもうお分かりか?

賈作男の役者退場。そこへ一人の男、出ハケ口から寝っ転がり顔だけを覗かせる。

覗き男 すみません、その銚ハケ担当、僕です

銀子 いいえ、賈作男の役者が、ですよ

覗き男 いいえ、本当は僕なんです

銀子 なんだい、お前かい

覗き男 はい、僕です

銀子 では、さっきの男は?

覗き男 あれは僕の虚構です

銀子 なんだい、お前かい

覗き男 はい、僕です

(二人、アハハハと腹を抱え笑う)

覗き男 自己紹介をさせてはもらえませんか。いきなり出てきたので

銀子 どうぞ、お好きだけ

覗き男 (起き上がり中央に)突然どうもすいません。僕は覗き男。僕の趣味は芝居を覗くこと。巡り巡って、他人の人生を覗き見することも好物になりました

銀子 大した変態なこと

覗き男 いえね、昔、お芝居の暗転中を暗視カメラで見たことがあるんです。それがまた面白くって。あれだけ照明に当てられている間は堂々と演技していた連中も、暗転するや否や背中丸めてオドオドと退場するんです。手探りしながらヨタヨタと

銀子 それで興奮してんの。やっぱり変態だわ。大変変態。じゃあ、このお芝居も覗くことができるっていうの?

覗き男 はい、もちろん

銀子 やつてみてよ

覗き男 この芝居はタイトルを『入墨淘汰』、主人公は入墨まみれの男、淘汰。ヒロインは市岡銀子、あんたのことですね。第一幕「白紙男と贗作男」そしてただいま第二幕「淘汰、登場」を実行中でございます。この後第三幕では新たな役の登場、衝撃的な事件を経まして最終幕ではなんと淘汰が……

銀子 (口を押えて) ちよい、ちよいとお前

覗き男 フガフガ、なんでしょう

銀子 …… (呆れた表情で観客と覗き男を交互に見る)

覗き男 なんですその目は。僕は役者じゃないんです

銀子 あほらし！役者じゃない奴が、どうしてこの舞台に立ってるのさあ
覗き男 地平線を間違えて僕だけこの舞台に吊り上げられたんです。沖上げされた魚みたいに。向こうにいる疲れ切った顔したお客さんたちと同じ立場なのに。お芝居を覗いて、他人の人生を覗こうとしている。ここにいる皆覗き魔なんですから。あんた役者ならわかるでしょう。どうです、覗かれています側としては

銀子 ソツとします

覗き男 いえね、銀子さん、でもここからが面白いんです

銀子 なんです

覗き男 こんな僕にも人生を覗けない奴が、この世にたった一人いるんです

銀子 たった一人？ (いぶかしげに)

覗き男 はい、客席からいくら覗いても、役がそいつの人生にすり替えられているような

銀子 他人の人生を、まるで自分の人生のように演じてしまうってことかい

覗き男 はい。そう考えると、むしろこの人には…覗くだけの人生がないと思うんです

銀子 空白自体が人生…そいつとはどいつだい？

覗き男 そいつの名前は…流れの淘汰、人呼んで、入墨淘汰！

銀子 興味湧きます。そいつはなぜ入墨淘汰なんて呼ばれてるの？

覗き男 (耳を貸さず) 僕はいつか絶対覗いてやるんです。奴の人生を、それだけが僕の生きがい。僕の生きる意味です

銀子 無視するんじゃないよ。おい、お前！ (近寄り)

覗き男 おい、お前！ (客席を指さす)

客席後部にはずっと客に気づかれず控えていた淘汰が立ち上がっている。

淘汰 (舞台の方に寄って行きながら) やいやい、やいやい、誰だい、俺の人生を無断で覗

こうとした奴は

覗き男 おや、忌まわしい、忌まわしい、忌まわしい、忌まわしい……

銀子 ……あんたが、淘汰さん？

淘汰 (舞台上がって) そうさ。…ずっとあそこで体縮めて出番待ってたんだ

銀子 あたしは銀子。市岡銀子です。この犯罪者が悪いのよ、あたしじゃないのよ

覗き男 銀子ちゃんひどいや。えーん

銀子 ゲツ、ウン泣きしやがってえ。こいつ、家宅侵入罪ならぬ、人生侵入罪だの芝居侵入罪だのやらかした覗き魔よ。ここにいる全員よ。大人しく客席に座っていればいいものを、舞台の上まで上がってきた覗き男がこいつ

覗き男 で、でもあんたの人生だけは覗けないんです。普通の役者は「役に成り切れ」って言うわけでしょ、それがどういうわけか、あんたは役を演じながらも、ずっと淘汰のままなんだ。そこが魅力的でね、僕淘汰さんの芝居の大ファンでもあります

銀子 ね、ヘンタイでしょ

淘汰 それは…こいつのおかげだろう（上半身びっしりの入墨を見せる）

銀子 ギョッ、大層な入れ物なこと。何を彫ったのさ

淘汰 今まで俺が演じてきた芝居の名前を全部彫ってるのさ

淘汰、歩き回って

淘汰 自分の人生を生きている時間よりも、舞台の上で他人の人生を生きている時間が長くなった奴は亡霊のように、永遠に芝居の上をさまよいつけるんだよ。たった2時間の芝居に何十年といふ人生を喰われないように、こつこつと体の一部にすることで俺は芝居を忘れないし、芝居も俺を忘れない。自分の本当の人生を誰かに覗かれることもない、この舞台の上で俺が俺の人生を見つめる指標にもなるのさ！

ザアツと海鳴りの音。青く照明輝いて。

銀子 だから、入墨の淘汰…

覗き男 はあ、すっかり人生をもったお方なんですなあ

銀子 黒く染まった入墨が、照明に反射して鱗のように光っている

淘汰 （少し偉そうに）どうだい、聞きたいかい。そんな俺の『劇場論』

銀子・覗き男 『劇場論』？

雰囲気変わる。淘汰、格好つけてダンディに身振り手振りで演説する。

淘汰 照明を当てられ他人を生きる事が役者の仕事。しかしその実、彼らは自分本来の生き方を行う時間を制限されているのです。その対価に観客はお金と敬意を払うのです

銀子 ほんほん（ビン底メガネをさし台本にメモを取りながら）

淘汰 もちろん劇場には役者以外の人間も存在します。しかし、脚本家や演出家が欠けてしまふ劇場は存在しません。漫才にだってバレエにだって、脚本は存在するのですから

銀子 ほんほん

淘汰 おい、あんた

銀子 なんですよ

淘汰 必死にメモとってんのな

銀子 活字化して小説にしようと思って。ほら、耳は肉体の蓄音機でしょう。耳に勝る冒険譚はないのよ

淘汰 ばっかもん！

銀子 なんてよお

淘汰 芝居をしてんだ今は

銀子 でもって、あたし自分の役者としての人生に自信ないんだ。だって自分の人生もロクじやないのに他人の人生演じ続けるなんてさあ、損してるような気がしてさあ。だからいつそ文豪にでも転向して金稼ぎしてやろうと思って

淘汰 はん、芝居を文学にねえ

銀子 おんなじですよ、おんなじ

その時「キャー！」と黄色い歓声と共に一幕の女たちが出てくる。銀子を押しつけて

女たち 淘汰さん、かつこいいい！

淘汰 ありがとう、ありがとう、可愛い子たち

覗き男 あんた女性に人気あるんですね

淘汰 二枚目役者だからな

銀子 劇場の外に置いてあるスタンド花もお前たちかい

女たち はぁーい、そうです！

女1 あたしたち、キャーキャーガールズ

女たち うっふん

女2 朝日町三番街の売れない娼婦

女3 役名は女1、女2、女3！

女たち うっふん

銀子 なんだい何の用だい

女4 そうそう、人探しをしているの

女1 芝居の中にはいるはずなんだけど

女2 楽屋を見ても

女3 客席を探しても

女4 あの人たちが見つからないのよ

銀子 あの人？

女1 夜子さまと、そのフィアンセさまよ

女2 一幕では確かにいらっしやったのに

女たち ああ、今ごろどこへいるのやら（淘汰に絡んで）

女3 ねえ、淘汰さん

女4 一緒に探して下さらない？

女たち うっふん

銀子 （女たちを追い払って）しっ、しっ！あっち行けっ、この野郎共！

女たち、キャーキャー言いながら退場。

銀子 女が集まると姦しいったら

覗き男 偉くムキになっちゃって

淘汰 人探しか…。芝居の中の人探しは大変だぜ

銀子 いいのよ、どうせすぐ見つからんだから

淘汰 この劇場空間は常に拡張と膨張を続けている。ありやあ、見つけるには一銀河分くらいの広さを探さなきゃ

覗き男 そんなに、ですか

淘汰 そうさ。だから劇場の中にはたくさんの手配書が貼ってある。「この顔を知りませんか」

「この名前を知りませんか」ってな。…俺は今まで何人も見て来たさ。芝居に自分の名前や肉体を奪われた役者を…

銀子 それを、芝居の入墨を彫ることで解決してきたってわけかい、入墨淘汰

淘汰 ……（少し困ったように言葉に詰まる。どうやら次のセリフが出てこないらしい）

銀子 （小声でセリフアシスト）

淘汰 （照れ笑いの表情を浮かべながら納得いった表情で）そ、そうさ、俺の入墨は俺が俺の人生を歩んでいる証明。まるで歩く北斗七星、さ…？（少し不安そうに）

銀子 すいません、一旦中断！客電付けてください

客電つく。袖から役者たち出てくる。ここから先は全員素で各々自由に。

役者 なに、どうしたの、何か問題？

淘汰 すいません、セリフすつとばしました

銀子 客電付けてください！しつかりしろよ、まったく

【しばらくの手引き】一気に素に戻る舞台。淘汰役者に台本確認をしつこく促し、様々な注意をする。

「4幕のあそこ、幕介してほしいんだけど…」「上手プリセット汚い、気を付けて」「道具直します」「ナグリ取って」自由に、思い思いに開場前を演じてほしい。観客はいないような振る舞いである。

客席で小道具を直す、通話をする…劇の虚構性が消失する。

役者 明転のままハケ確認させてください、一幕！

一幕役者、出てきて暗転前のポーズ（淘汰と覗き男は端に追いやられる）

役者 おい、お前銚ハケ

贗作男役者 すんません

役者 暗転のつもりで。キツカケ台詞からお願いします（拍子をとって）

役者たち チエエホフの芸術は芸術的自由と真実の芸術である！

明転のまま、音の中手を繋いだり壁伝いにしながら滑稽にハケてゆく。

急転、いきなり銀子が贗作男役者の手を止める。役者たち・音ストップ。照明戻って

銀子　：淘汰さん、失礼を承知で聞きます。あなた、大した役者です。しかしこの劇場を海だ
と見立てると、肉体の入墨であるあなたは一体なんなんでしょう？海を泳ぐ鯨か、それ
とも鯨を狩る刃刺しか！それは芝居の上では欠かせない、追うもの、狩るもの！

淘汰　（銀子と近接して睨み合い）ほらほら、こんな風になにが芝居か真実かわからねえわか
らねえ海の真つただ中の劇場じゃあ、お前も俺も生きちゃ帰れないぜ！

覗き男　鯨か、刃刺しか…！

銀子　この脚本や演出の支配する舞台で、あなたは どうする というの。他人を演じている間、
あなたは どうやって己を持って しよう としているの。この海という舞台の上を、どちら
の立場で暴れてみせる というの！

荒々しい海の波の音。舞台は青く染まる。

淘汰　もちろん俺は、（見栄をきつて）大鯨さ！入墨に黒く染まった哺乳類！海なんてちつぽ
けなもんじゃねえ。海に反射した宇宙、その宇宙を泳ぐ鯨座のように、この大きな命を
輝かせてみせるのさ！

もう一度大きな波の音。銀子、銛を奪い取り淘汰の前で正面を睨み

銀子　決まりだ、じゃあ、私は刃刺しになるよ。舞台の上に忘れ去られたハケ忘れの銛を、今
こそこうして因果に構えて、地平線目指してあなたを追いかければ役者としての自信
が輝くような気がします。あたしは市岡銀子、刃刺しの銀子。（銛を構えて見栄）あん
たという鯨を狩る、刃刺しの女首領！

役者たち、周りでポージング。舞台はまぶしく照り映えて

淘汰　お前は捕鯨船の一番先頭に乗る。そうして、銛を構え子包丁くわえて海を睨みつける！
（銀子、その通りの勇敢なポーズをして）

銀子　そうです。そう。海は荒海でしょうが、とんと負けや致しません。そうして台本の中を、
起承転結をも飲み込み暴れまわる肉体の獣に、えんやこらと、刃を突き刺すのです！そ
うすれば、海の女王はあたしですもの！

覗き男　これはどえらい大海戦だ！お二人のその勇氣、僕は買った！

淘汰　（入墨を見せつけ）俺お前になら殺されてもいいぜ。なんだか、そんな気分なんだ！

銀子　（銛を構えて）海に暴れる六億光年の大鯨と、それを狙う一人の女捕鯨主！ああ、なん
だかあたし、ワイルドになってきた！

勇ましくポージングし正面を睨む。荒々しい雰囲気の中、ゆっくり暗転。

第三幕 白痴の銃追

明転すると神父服の神父（実は白紙男）、シスター服の娘（実は夜子）が立っている。二人とも黒包帯を目に巻いている。

神父（台本を読みながら）「男は神父らしき風貌で、妙齡の女は修道女のようなのである。男は「神父」、女は「娘」。正式には母国語の娘。母国語はこの言語を話す我々話者の母であるから、その娘と称した彼女の名は理にかなっている。季節は春とも秋とも、夏とも言えなければ当然冬でもない。そんなある日のことである…」そのお話はこう始められている

娘 小説の一節でしょうか

神父 いいえ、台本のト書きです。文学における地の文、とでもいうべきでしょうか。三人称がいわゆる「神の視点」と呼ばれるように、それは演劇にも通用するでしょう。写真と絵の違いと、文学と演劇の違いは極めて同じなように思います

娘 また難しいことをパンの耳みたいにくねくり回して。毛髪の退行が早まりますよ

神父 …祈りは儂いものだ。さあ娘、今日も儀式を始めよう

二人、正面を向いて一礼。

神父（台本を読みながら）女は夫の帰りを今か、今かと待っている

娘（ウロウロしながら）あの人いたら、遅いわねえ…。もう、夕飯がこんなに冷めてしまっ
た！はあ、新婚ですのに先が思いやられるわ

神父 待った、台本にはただ「夫を待つ女を演じる」と書いてある

娘 演じました

神父 そんな風に独り言を言うものかね

娘 想像力の問題ですわ

神父 ならん、ならん。リアリティがない。お前のその薄っぺらい演技が拍車をかけてダレている。演技過剰は今のご時世うけがよくないよ

娘 おっしゃる通りで…

神父 日常を丁寧に取り出し、健やかであること。ここの教会の決まりだ。…続いて（台本を読み）自分に自信のない女は、親の勧めでお見合いをすることとなった

娘（かしこまって早口に）あ、よろしくお願ひいたします…。え？ああ、あたし、えーと、趣味は乗馬にクリケット、投資…

神父 待ちたまえ、自信のない女、という設定だ

娘 そうですよ。ですから、緊張しいということでも早口に

神父 自信のない女が、そんなにペラペラと話すものか、初対面の男の前で。しかも趣味が全く説得力を持たない！お前の地の性格が役を押しつけてペラペラと出しゃばるのだ！

娘 はい、おっしゃる通りで…

神父 困るよ、台本通りやってくれないと。台本は聖典だ。聖典を読むとき、そこに読み手の主観はいらない。神の主張が、無知な惰性によって遮られるからだ

その時、キャー!と黄色い歓声と共に修道服の女たちが登場する。

神父 そのこのシスターたち、今は儀式の最中だ

女1 違いますう。あたしたち、朝日町三番街の売れない娼婦で

女2 人探ししてるんですう

女たち アーメン

娘 ここは教会です。キャピキャピしたおなごの来る場所ではありません!

女3 そういった感じでさつきも追い払われちゃったの

女4 ほんと、お芝居の中の人探しって大変

女たち アーメン

娘 それから、祈りの作法はアーメンなどではありません。見て御覧なさい(耳たぶを2回引って張りを1回つまむ、それからお尻を叩いて)テゲレツのパ!...さあ、やって御覧なさい(もぞもぞとやり始める)

娘 敬虔な信徒が、そのようではいけません!

女たち (しつかりとやって)テゲレツのパ!

女1 ここでは何の神様を祀っているの?

神父 ふむ:「神の視点」とでも言うべきかな。この世界の全てを握り、起承転結全てを見通す視点をもち、神様をね

娘 小説で言うところの筆者、戯曲で言うところの脚本家:

女4 その神様なら人探しも楽々だわ。全てお見通しですもの!

女1 ねえ、その神様にお祈りしましよ。行方を教えてくださいとね

女たち それは名案、テゲレツのパ!キャハハ!

娘 おやめなさい、ニワカ信徒の願いなど

神父 さ、帰ってくれないか。儀式の途中だ

女たちともみ合いになる。キャーキャーやっていると、黒包帯の目隠しとれる。

女たち あ!

女4 よく見た顔

女2 夜子さまと、白紙さまじゃございませんか!

娘 何を言っているのです。戯言です

神父 そうだ。私たちは今「神父」と「娘」という役を生きているのだ

女3 目を覚まして下さいよお

女1 夜子さま、元の「夜子」さまに戻って下さい

娘 ああ、いけません。頭痛が

神父 とにかく、邪教徒は帰った帰った(追っ払う)

女2 一人二役はもう結構

女1 二人とも、お芝居に人生を奪われて

女3 本当の役がどれだかわからない!

女たち テゲレツのパ！キヤー！

女たち、姦しく退場。海の荒れた波の音と鯨の鳴き声とする。

神父 おえええ：

娘 しつかりなすって（背中をさすって）

神父 なんだか、なんだか吐き気が：船酔いのような吐き気がするんだ

娘 口をお抑えになつて

神父 聖典を持ってきてくれ。でないと、「あれは3番船だったかな。執刀が乗っていた。艦押

（ともおし）が艦艫（ともろ）をうけもち：」畜生、なんだか口か知らない言葉が溢れて

「吐き気とともに胸の奥底から：」ああだめだ。早く、聖典を：

娘 はい、今すぐ（台本を渡す）

神父 （ページを開き口を拭う）

娘 まだです、まだ、誤った演技法で右頬が汚れています！

神父 （ゴシゴシと拭う）くそう、くそう

娘 まだですよ、まだ、あなたのお口から海水が漏れだしてしまわないように！

（力いっぱい拭ったためビリリと破れる音がする）

娘 アアッ！

静まり返る

娘 聖典が：。なんということ、神父、教会始まって以来初めての事態です。聖典が、台本が破けてしまった！ここから先の世界が、無くなつてしまった！

神父 （お祈りして）ああ、お許しください。母なる言語よ、母なる海よ、母なる劇場よ：！

娘 （せわしくして）こうしちゃいられません。さあ、今すぐ出発しましょう

神父 何をする気だ

娘 言語を取り戻す旅に出るのです。言語は海に揺蕩っています。いつか読んだ本にこう書かれてありました。「劇場をたずねんとすれば、海をたずねよ」と！あなたの過失で消えてしまった芝居を、釣り上げるのですよ

神父 何を捕まえれば、芝居が取り戻せるんだ

娘 本にはこうとも。「海は有限でありますが無限の海があります。それは宇宙です。宇宙という海では、怪物鯨が悠々と泳いでいるのです」：ええ、それはきつと鯨です！（銚を取り出して）参りましょう。鯨狩りです！

暗転

第四幕 連幕淘汰の地獄芝居

暗黒の空気が流れる。うしろに水の入った水槽がおかれている。

黒衣たちが次々現れ、各々架空のエチュードを行う。淘汰・銀子、登場。

銀子、淘汰を照明のように懐中電灯で照らす。

淘汰 (偉そうに) あんたは病気なんです。体中からウロコが生えるなんて

黒衣1 (取り乱して) 朝目覚めたらこうなっていたんです。何の因果か、前世でしょうか。このままでは私は肺で呼吸ができなくなり、水の中で暮らさなければならなくなります。いいじゃありませんか。海や川や、水槽の中だつて、きつと住めば都ですよ。金魚売りにさえ気を付ければ、たいしたことはありません

黒衣1 私は海の中などで生きていく勇氣はありません。ヒック(しゃっくり)、私は、ヒック、水槽の中で誰かの啓示ばかりを信じていたのです

淘汰 鯨には、なりたくない

黒衣1 なれやしません、ヒック。いつか人間であったころを忘れてしまうでしょうから…先生(すがつて) どうか、お菓を…

淘汰 困りましたね、僕は運の悪い奴が大嫌いなんです

黒衣1、痙攣して倒れる。周りの黒衣もそれぞれの場所と同じことをする。

次のエチュードが始まると黒衣たちは立ち上がる。銀子と淘汰のエチュードの往復だ。16
今度は淘汰が銀子を懐電で照らして

銀子 (貴婦人のように) またテーブルクロスでお口をふく。ほんと、あなたの行儀の悪さには愛想尽かしましたわ

黒衣2 お母様！御覧下さいませー蜃気楼が一面に…

銀子 オホホ、ばかねこの子つたら。あれは、幽霊ですよ

黒衣2 ヒッ！

銀子 正確に言うとは舞台の幽霊…。甘い香りのするでしょう。演出効果の蜃気楼、スモークでございませぬよ。(猫なで声で) さあ、坊や、お口をあげてごらんなさい

黒衣2 こうですか…

銀子 そうしたら坊や、あの幽霊を飲み込んでごらんなさい！

黒衣2 ええ！？

銀子 (捕まえて) さあ、吸え！吸うのよ！そう、もつともつと力一杯！ホホホホホ！

黒衣2、羽交い絞めにされ苦しみ倒れる。他の黒衣も同様に。銀子、淘汰を照らす。

淘汰 (急に態度を変え) でよ、お前あの噂知ってるかよ

黒衣3 知らねえよ、なんだ、あの噂って

淘汰 遠い町の水族館、そこでは次々に魚が行方不明になるんだとさ

黒衣3 なんだそれ

淘汰 その代わり、飼育員の数が比例するように増えていって…

黒衣3 信じねえぞ（興味なさそうにそっぽを向く）

淘汰 俺思うんだ。彼らは、魚という役を終えて飼育員という役を始めただけのことなんじゃないかとね

黒衣3 へえ。飼育員の次は、なんの役をやるんだよ

淘汰 さあな、脚本家にでもきいてみる（背後から黒衣2を刺す）

黒衣3 お前…どうして

淘汰 なんの脈絡もねえよ。俺は運の悪い奴が大嫌いなんだ

黒衣3、倒れる。周りの黒衣も同様に。淘汰、銀子を照らす。

銀子 （座り込みしなり、しなりと）ねえ、そこのお船のお兄さあん

黒衣4 んまー、これはべっぴんさん（すり寄って）

銀子 漁の際中かしら。でも見て、あたしの下半身。鱗が光って可憐でしょう？

黒衣4 まるで人魚姫みたいだあ

銀子 その通り、あたし人魚姫。ねえ助けておくれよ

黒衣4 なんのお手伝いを？

銀子 あたしの歌を聴いて、そしてあたしに溺れて頂戴…（そそのかして）

黒衣4 まっ、まさかお前！

銀子 そう、綺麗な歌声で船を沈める海の魔物さ！聴いてって頂戴、見てって頂戴、死人の大17
安売りだよ！（大笑い）

黒衣4、引きずられるように転げて苦しみ倒れる。周りの黒衣も同様に。

エチユード終わり全員、面白げに笑う

淘汰 ああ、楽しかった（煙草を取り出し）

銀子 （台本を取り出す）ほら、台本がビリビリに破けてら。突然こうなってしまったので、

この先のシナリオやセリフがわからなくなっちゃいました

淘汰 困ったことに、この舞台には脚本家も演出家も見当たらねえ

銀子 ですから、あたしたちがこうして際限なくアドリブ芝居を続けているんです

黒衣たち、うんうん、とうなずく。

淘汰 だからってしかしよ、照明まで役者がやるのかよ

銀子 本来はお客がやるべきなのよ。自分の見たいシーンだけを、自分で照らして観るべきだもの。自分の代りに他人に人生を演じてもらっているのだから

淘汰 そうだ、お前ら裏方やつてくれよ

黒衣1 ええっ

黒衣2 もう少し役者やっていたいっすよ

黒衣5 そうだそうだ！

淘汰 裏方でだって、他人を演じる立派な役者じゃねえか

銀子 ね、お願い。この非常時なんだよ

黒衣たち ぶーぶー

銀子 このトタン板の上に立っている間だけは、何をしても演技とみられるでしょ？だからあんたたちは裏方一族として舞台を泳ぐのよ

黒衣5 裏方という役者として：

黒衣3 仕方ないわ。舞台には欠かせないもの

黒衣4 その代わり、いつだって俺たちやあんたたちのこと狙っているからな

黒衣2 震えて舞台に立ってる！

黒衣たち、笑いながら退場。

淘汰 …人を殺しても

銀子 そう

淘汰 人を愛しても

銀子 そう

淘汰 はたまた、人ではなくなっても

銀子 犬だって猫になるわ

淘汰 銀子

銀子 なあに？

淘汰 俺は実際臆病なんだ

銀子 それがどうしたのよ

淘汰 臆病だから、本当の自分を隠すようにこうやって他人を演じ続ける…

銀子 そんなもんじやないよ。あんたは立派な役者さ。役を演じながらも己を忘れない、台本にあらがい続ける、舞台を縦横無尽に暴れまわる大鯨だもの

淘汰 入墨の下は血蛇がうずいて堪らないんだ。自分の人生の目印のために入墨を彫ったつもりが、いつの間にか本当の自分の肌を隠しちまってるんじゃないかって…

銀子 ヘンな淘汰。どうしたのさ、らしくないよ

淘汰 銀子、人魚を演じたお前を見込んで頼みがある

銀子 なんてしよう

淘汰 頼っていいのかい

銀子 まるで今まで一匹で生きて来たかのような言いつぶり

淘汰 …いつか、俺が本当の自分を忘れて台本に人生を喰われちまっていたら、びっしり生えた人魚のウロコを星にかざして、刃刺しの女首領の面持ちで迷わず俺に鉾刺してくれの。ばっかだねえ。あたしとあんたの仲じゃないか…

淘汰 鯨だの海だのは、役者や芝居の例えかもしれねえ。でも今はそんな例え話じゃないんだ
銀子 …あたしに人殺しさせようってのかい

淘汰 ああ、他人に自分の人生取って代わられるより、その方が随分幸せさ

銀子 …淘汰、臆病だというあんたをなんとか支えてあげたいけれど
淘汰 (遮って) 台本のないエチュードにそろそろ戻らねえと

急に手を後ろに縛られているようにしてしゃがみ込む。照明変わって

淘汰 お母様、ごめんなさい、僕が悪うございました…

銀子 (豹変して) テーブルクロスはお口を拭くためのものではありませんよ

淘汰 (おびえて) ごめんなさい。でもこの縄をほどいて下さい！幽霊の食べ過ぎでお腹が苦しいのです

銀子 ホホホ！お前の苦しむ姿を見ながら一杯ひっかけるのがお母様、たいそう好物でならないのよ！

淘汰 (立ち上がる) どれ、苦しくなってきたでしょう。早くこの水槽にお入りなさい

銀子 (崩れ落ちるように座り込み) 私は魚などになりたくない、先生！先生！ああ…鱗が、まるで月のように輝いて…

淘汰 さあ今です。この水槽にお入りなさい。水族館でもいいのですよ、サメと一緒に泳ぎたいならね

銀子 (豹変して) ホホホ！もっと苦しめ、もっともつと！アハハハハ！

淘汰 さあ、お早く。飛び込みなさい！飛び込め！

大きな波の音。静寂。

銀子 …まるで人間シーン

淘汰 操っていると思っても

銀子 操られている

淘汰 文学に背いた肉体の

銀子 肉体の覚書

淘汰 さあ、道を開ける！

銀子 文学サメは水族館へ、芝居鯨は水槽へ

淘汰 さあ、道を開ける！さもないと！

淘汰、水槽の中の水を背後から思いつきり銀子に吹っ掛ける。二人、客席をにらみつける。大きく鯨の鳴き声と海鳴りの音。地響きのような大音量の中、暗転。

第五幕 人間シーソー

暗黒の雰囲気。

スピーカーを乗せた乳母車をあやすように揺らす音響女。ポロ布を縫い続ける衣装女。壁にスローでトンカチを打つ大道具男（釘が横並びに三本、そのうち最左には蕪人形に釘がささっている）。ミニチュア小屋と黒帽子を両手に持ってシーソーのように揺れている美術男。スタンド式スポットライトを移動させる照明少女。

衣装女

芝居はいつも真つ暗くだから、誰かが光を当ててはなりません。（照明少女、衣装女を照らす）芝居はいつも暗闇だから、こうして光を当てて何かを見えるようにするのです。芝居は光の中で行わるものではありません。芝居とは本来暗闇で、そこに光を灯すことでようやく可視化されるのです。可視の宇宙では暗闇は一瞬忘れられた存在なのです。なに、なに、なにが見える。暗闇の中に、何が見える。何が聞こえる。鯨の鳴く声か、海鳴りか……

美術男

―芝居はいつも真つ黒だから、黒いものは見えない。舞台の鉄則。可視から非可視へ。非可視から可視へ。それは常に自由に変動し、色をみたけりやのぞくしかない

照明女

舞台上において、黒いものは見えないものとする！

美術男

黒子は見えますか？

照明女

見えません

美術男

では見えるものは？

照明女

見えません

衣装女

それは正解。すべては見えない……

大道具男、よそ見をしていて蕪人形の釘にトンカチを打ってしまう。美術音、ジタバタと転げ苦しむ。

音響女

（乳母車のスピーカーから赤ん坊の泣き声）静かにしておくれ、坊やが起きてしまうわ

再度蕪人形にトンカチを打つと、めつきり静かになる。

道具男

なあ、俺たちいつまでこうして居ればいんだ

衣装女

さあ……。台本が破けて脚本家も演出家も、本来の裏方だつていなくなっちゃったんだから

道具男

全てが劇場に吸収されてしまったか……。もうこの芝居には役者しか残ってねえ

照明女

照明プランは？

道具男

ない

音響女

音響プランも……

衣装女

ないよ

照明女

それじゃ、どーやってこの芝居の裏やればいいんですか。指示くらいないと……

美術男 (ゆっくり起き上がって) いてて…。自分の好きなように照らせればいいだろう。音響だ
って好きな時に好きなように入れればいいし
照明女 無理がありませんってエ…
衣装女 おかしいじゃないか。役者も裏方も、誰かの指示がないと生きれないだなんて
美術男 その、今この芝居には脚本家も演出家も不在なんだ。せつかくのアドリブ芝居、好きなよ
うにハチャメチャやってやろうぜ

その時、ボロボロの服を着た女たち(キヤーキヤーカーガールズ)が「キヤー」と黄色い歓
声を上げながら登場。スピーカーがキューンと耳障りな音を出す。

音響女 なんだい、騒がしいねえ、ああ、よしよし…
女1 ねえ、見て。衣装がこんなに破けてしまっ
女2 人探しをしていたらボロボロになってしまったの
女3 途中怪しい教会で会ったその人は
女4 顔はそっくりだけど全くの別人だったの！
女たち キヤー！
衣装女 煩いねえ。直してやるから身ぐるみ剥ぎな
女たち やーん、えっちい！
衣装女 ほら、早くしな！

そこへ淘汰がフラフラとやって来る。

女たち キヤー！淘汰さあん(一斉に脱ぎ始める)
照明女 ゲツ、入墨の淘汰
美術男 安心しな。裏方一族は案外楽しくやってるよ
淘汰 そうかい…
道具男 どうした、随分顔色が悪いぜ
淘汰 ああ…、アドリブ芝居が長引いてるせいで、頭が疲れてきちまってんだ…
女2 やだ、淘汰さんがお疲れよ
女3 癒してあげたい
淘汰 なんだか、エチュードのやりすぎで頭が痛いんだ…(頭を抱えて)
音響女 主人公さまも大変ねえ(嫌味たらしく)
女4 それじゃあたしたちが
女1 変わってあげましょう！

女たち、淘汰を横目にエチュードを始める。

女1 エチュード、兄と妹(手を叩く)
女2 お兄ちゃん！
道具男 トモコ…、お前はついてきちゃだめだ

女2 私もついていく。お兄ちゃん一人で東京で働くなんて、だってお兄ちゃん料理も洗濯もできないじゃない

道具男 …お前は母さんの面倒を見る。俺は東京で仕事をしてお金を稼ぐっていう役割がある。だから、もうこれ以上駄々をこねるのは止めなさい（振り切る）

女2 お兄ちゃん！…私毎日手紙送る。お兄ちゃんも毎日書かなきゃだめよ
…わかった。だから母さんを頼んだよ。お前はしっかりした子だから、頼んだよ！

女1 （手を叩く）エチュード、泥棒猫（手を叩く）

照明女 おいお前何度目だよ！（胸ぐらを掴んで）あたしの彼氏と会うなっつたよな！

女3 はん、たーくんだって、私の方が好きって言ってたわよっ

照明女 このアマ！ぶん殴ってやる！

女3 キーー！

女1 （手を叩く）エチュード、任侠（手を叩く）

美術男 よし、俺が先陣を切る。後ろは任せた

女4 はい、アニキ

美術男 （走り出すが不自然。銃声をするのを待って）ぐあっ！

女4 あ、アニキい！

美術男 お前は、生きる。俺の分まで…

女4 アニキーっ！

衣装女 （サングラスをかけて）おうおう、ごろつきがいきがりよっつてからに
ここまで来たらお前らの命はないぜ！大人しく…

道具男 （遮る）ちよ、ちよっと待て。ここの照明こんなポップでいいのかよ

照明赤に変わる

道具男 うん、大丈夫

衣装女 待つて待つて。ここそれっぽい音楽ないの

音響女 う、うーん…（スピーカーをいじる。いろいろ音楽流れてくる）

美術男 どれもこれも違うような

音響女 もうわかんないわよ！

美術男 あと音響、銃声遅れてた。しっかりしてくれよ

衣装女 ねえ、小道具のサングラス壊れてるんだけど

女2 あんた、セリフが「アニキー！」ばかりで何も伝わらないわよ

女4 声が小さい人に言われたくないですー

女3 ちよっと、胸ぐら掴まれた時引つかかれたんですけど！

照明女 そんなの事故だもーん！

口論がヒートアップする。

淘汰 やめねえか、落ち着けよ

照明女 だって、皆方向がバラバラなんだもん！

衣装女 …やっぱり私たち、脚本家や演出家がいないとだめなのよ

美術男 役者だけで芝居なんかできあがらねえ

淘汰 そんなことはない。不在の状態だって、役者の肉体で舞台は出来上がるんだ

道具男 無理だよ淘汰。脚本家不在の舞台だなんて、マストのない船みたいなものだぜ！

淘汰 そうさ、マストも船頭もない船で大海原に立たなきゃいけない。ここにあるのは役者の肉体だけ…、他の全ては己の肉体に内在してんだ！ぐっ…（頭を抱える）

衣装女 淘汰！

美術男 （支えて）大丈夫か

淘汰 …今、何の芝居をしてんだ

音響女 何言ってるんだい、今は…

淘汰 今は何の芝居をして、何の役を演じてるんだ。医者か、患者か、坊やか、アニキか…！

道具男 おい、しっかりしろよ

淘汰 俺はなんだ俺は、今までどんな人生を歩んできたんだ。俺の人生、人生、人生。俺というただ一つの現象については何も思い出せない！（腕の入墨を見て）この入墨は、俺が俺である指標だが…同時に臆病である俺自身を隠してしまっているんだ。銀子、銀子、銀子はどこだ！銀子！

そこへ走って神父と娘がやって来る。

娘 探した！探したわ、入墨淘汰！

道具男 誰だお前ら！

女たち キヤー！夜子様…じゃない、テゲレッツのパ！

娘 ああ、神よ、感謝します。失われた全ての言語、全てのセリフ、そして全ての起承転結を取り戻すために、海に荒鳴る大鯨を探していたんです！

美術男 鯨…

娘 「劇場を海だとすると、役者はさしずめ海に生きる生き物」。劇場を呑み込もうとしている黒い大鯨。まさに月夜に照らされた海獣！それがあなたです淘汰

淘汰 俺をどうしようってんだ

娘 台本の言語の中へ納まるのです。そこからはみ出すことは教会の規律に反します！

神父 淘汰、お前は海で生きていくにはあまりにも荒々しく、あまりにも無尽で我侷だ！我々とともに水槽へ帰ろう。そうして聖典を元に戻すのだ！

淘汰 嫌だ…、嫌だ！お前ら、俺を騙そうとしてんだ！（後ろずさんで）ぐっ…頭が…

女1 夜子様、白紙様、目をお覚ましになつて！

女2 ねえ、あなたたちも止めて…

衣装女 芝居を元に戻すためなら仕方ないわ

道具男 早いとこ本来の役に戻りたいんだ。俺たち役者だからな

女3 薄情者！

神父 海に揺蕩いします、我らが神よ、お祈り申し上げます…

淘汰 俺は、誰かが作った他人の中で生きていたくない！俺は、何者を演じてても、俺なんだ！こ台本なんか縛られるものか、この芝居は、役者のものだ！

娘
テゲレツのパ！（淘汰ににじり寄って）

娘、銚で淘汰に襲い掛かる。淘汰と娘、激しく攻防する。女たち、娘を止めようとそれぞれ襲い掛かるが払われる。一瞬羽交い絞めにされるが、銚をかすめられながら淘汰を潜めているはずだ。
逃げ出す。

娘
（女たちに腕を取られて）くそう！取り逃がした。しかし手ごたえがありました
神 父
手負いの鯨だ、奴は劇場の外へは出れない。あの入墨だ、すぐに見つかる。どこかへ身を潜めているはずだ！

おどろおどろしく暗転。

第六幕 荒海

夕焼け小焼けで日が暮れて

山のお寺の鐘が鳴る…

おてて繫いでみなかえろう

からすといっしょにかえりましょう…

夕焼けの中で銀子、もの哀しく歌う。腰には紐で空の水槽が括り付けられている。

覗き男

むかし、昔、入墨淘汰という男がいました。体は入墨に染まり、出自の不明ななんとも不思議な男でした。彼は云いました。劇場は海で役者は海に生きるものたちだと。…神は鯨を水槽に収めようと思いました。いや、もしかしたら鯨が水槽に入れられたはいが耐えきれず、水槽の透明板を破って一声高く鳴き、どんどか海へ帰っていくことを最終想定としていたのかもしれない

銀子

(ふてくされて) 例え話は結構だわ

覗き男

水槽の中で魚は大海を知りません。本物の海を知らなくては…

銀子

分からないわ

覗き男

想像力の問題ですよ

銀子

想像力の問題で淘汰が帰ってくるなら、あたしどんな想像だつてするわ。鳥になったり、雲にまたがったり…想像の中で何度だつて死ぬこともできるしその度に生き返つてみせる。役者ですもの、簡単だわ。だけどそんなことしたつて淘汰は帰つてこないじゃないか。淘汰のバカ野郎、どこへ己を消したやら。もうしばらく見かけやしない。劇場中に人探しのピラを貼った。世界中を探し歩いたさ。でも見つからないんだ。見つからないんだよ

覗き男

淘汰さんも言っていたでしょう。「劇場空間は常に拡張と膨張を続けている」つて。世界中歩き回つて探したくらいで偉そうな顔しちゃいけません。銀河中探さなければ

銀子

あんた、探すふりして遊んでたんじゃないの

覗き男

相変わらず人聞きの悪いお嬢さんだ。僕はね、銀子ちゃんとは結構いいタッグを組んでいたと思うんですよ

銀子

その銀子ちゃんつてのやめてよ、気持ち悪い

覗き男

いやですよ、やめません。あなたがどれだけ僕のことを気持ち悪がろうがやめません

銀子、台本を取り出し読む。

銀子

『役者のための航海術』…。その一、この芝居は役者自身のために行われなければならない。その二、オールを脚本家の手の内から役者に明け渡すこと。その三、役作りのために本来の己を忘れてはいけない。魚になりきるために歩行を忘れてはいけないからだ。その四、劇場は無敵である。海は有限だが海からあふれだした宇宙は無敵だからである。その五、独りぼっちの海では唄を歌うこと。まるで孤独な人魚でしょう…

銀子、腰から紐でぶら下げた水槽を引きすりながら

銀子 (大声で) おーい！淘汰やーい！…やい、淘汰！あんた、あたしを真つ当な女捕鯨主だと言ってくれたじゃないか。それなのに、肝心の鯨がいなくなつてどうするんだ。お前を刺身にする楽しみも、鯨油をとる楽しみも、その油で舞台を照らす楽しみもないじゃないか。文学をやるために芝居はあるんじゃない、それなら文学も母国語も、なんもかも蹴散らしてごらんよ！…水槽を破つて海へ行こうよ、この劇場を、音をたてて渡ろうよ！きつと地平線の向こうには、見たこともない世界が広がってるんだ！

波の音がするばかり。

銀子 (泣き出しそうになりながら)

覗き男 なんともまあ、いじらしいですなあ

銀子 なんてあんたは他人事なのさあ！

覗き男 他人ですとも。僕は役者じゃありません。客席から芝居を覗くだけの観客ですよ。間違

つて地平線飛び越えてトタン板あがつちまった、ただの覗き魔ですよ

銀子 ぐぬぬ…(怒りに地団駄踏んで)

覗き男 いじらしいですなあ。あれでしょう、銀子ちゃん、淘汰さんに女首領だなんて言われて

嬉しかったんでしょう

銀子 そんなんじやありませんとも、ええ、決して

覗き男 いいえ、役者としての自信が肯定されて浮き上がっちゃつてたんですよ

銀子 ぐわーっ！(腰から下げた空の水槽を振り回して)

覗き男 ぎやーっ！凶星だっ

争っているのと娘と神父、釣り竿やバケツを持って登場する。

銀子 あれ、あれ、夜子様じゃないの。それに、白紙のぼつちやん

覗き男 ああ、一幕の…

銀子 こんなとこで何してんのさあ。あんたんとこの女たちが探してたよう

娘 はて、知りませんわ

神父 誰だい、君

銀子 あたしだよ！ほら(ビン底メガネをかけて)ね！

娘 (無視する)

銀子 無視しないでつたら

娘 私たちは神に仕える、教会のシスターと神父です。随分前に、台本が破れてその先がなんもわからなくなつたでしょう？

銀子 ええ

娘 この神父が、破りましたのよ。様々なセリフから起承転結が失われてしまつて
銀子 にやるめ、あんたのせいだったのね！それで、何してんのさあ

神父 見りやわかるだろう。釣りをするんだ
覗き男 トタン板で何を釣ろうとしてんだか
神父 鯨だよ
銀子 鯨？

大きく海鳴りの音。

銀子 そいつはもしかして、入墨の入った鯨かい？

娘 そうです。入墨まみれの黒鯨！

銀子・覗き男 淘汰だ！

神父 お知り合いで

覗き男 知り合いも何も、僕たちも随分探していたんです！

銀子 それで、淘汰は一体どこにいるんです？

娘 取り逃がしました。(銚を取り出して) この銚で、確かに腕をかすめました

銀子 怪我を負わしたつてのかい！

娘 捕まえるためです。大したものじゃありませんわ

銀子 (ワナワナと) 覗き魔、こいつ、あたしたちの敵だよ！

覗き男 合点承知の助

娘 何するんです！

神父 やめないか、やめる！

覗き男、娘と神父の身ぐるみをはぐと、その下から夜子、白紙の衣装が現れる。

覗き男 やつぱり、一幕で夜子と白紙から着替えるのに時間がなかったので、その上から別人に成りすましていたんですね！

銀子 一人二役、ボロが出たよ！芝居に自分を奪われてひとつ前の役すら思い出せなくなっただ

夜子 わ、私…今まで何を？

白紙男 あっ、お前一幕のピン底女！

銀子 あたしや市岡銀子だよっ！『役者のための航海術』その三、役作りのために本来の己を忘れてはいけない。教会でお祈りだのしてる暇あつたら役者として出直しな！

夜子 「劇場をたずねんとすれば、海をたずねよ」…、ああ、私その本の通りに鯨を探しに行つたんです！しかし…淘汰がどこへ行ったのかはとんと知りません。最後に見た姿は、アドリブ芝居にもう頭が混乱していて…

銀子 淘汰が…？

白紙男 今ごろ生きているのか、はたまた自分をなくして海の藻屑か…

覗き男 (沈黙からの)…これ、言いたくないですけど

銀子 なんだい

覗き男 やつぱり言いたくありません

銀子 言いなさいよ

覗き男 言ったら本当のことになっちまいそうで

銀子 怖いのか

覗き男 それほど不吉な想像です

銀子 ではあたしが想像してやる

覗き男 やめといた方がいいですって

銀子 (恐ろしい顔で考えて) お前はこう想像したんだろ、「淘汰はもうどこかで野垂れ死んでいて、この世から一切消失した」って…

覗き男 言ってしまった

銀子 …(白目をむきばたんと倒れる)

覗き男 だから口に出さない方がよかつたんだ! (介抱しながら)

夜子 私たちも、淘汰を探します(衣装を拾って)

白紙男 いいか、言語に仕えた元神父の身として忠告しておきます。言葉は言葉通りの意味を持つ。これから先の芝居ではくれぐれも気を付けて。そして決して希望だとかなんだとかを捨ててはいけない!

波の音とともに夜子と白紙男、退場。

覗き男

(銀子の台本を読んで)『役者のための航海術』外伝、「入墨魚への指南書」…その昔、海で漁をする男たちは体に入墨を入れていました。海で死ぬと、顔では誰だか判別できなくなるのです。そんな時、体に彫られた入墨で誰の遺体だかを判別するのです。ですから入墨を彫ったのなら余分に気を付けなければなりません。その日から、自らを海で殺すことを覚悟しておかねばならぬのですから…

銀子

劇場で死ぬと、いろんな役を演じすぎて誰が誰だかわからなくなって、その遺体の判別をつけるために淘汰は今までやってきた芝居の名前を彫っていたっていうのかい!

覗き男

銀子ちゃん、こわい

銀子

こわいものか。お前言ったじゃないか。いつか、ただ一人覗けない淘汰の人生を覗いてみせるって、それはどうしたんだい

覗き男

正直もうよくわかりません。僕は芝居を覗いているつもりで、実は淘汰さんそのものを覗いていたんです。メソッド演技法だか、憑依演技だか知らないが、自分を隠して役になりきる役者の一方で、むしろ自分の人生に役を入れ込んでしまう淘汰さんは、立派な役者ですとも。でも、もうどこにもいないんです!

銀子

いなくなつてなんかないよ!

覗き男

銀子ちゃんの、わからんちん!

覗き男、怒って退場。大きな海鳴り。静寂。一人になった銀子、中央でポツンと

銀子

ねえ、淘汰、あんたはどうせそこで見てるんだろ!男子楽屋で、台本確認してき、それで上手舞台袖で自分の出番を待ちながら、あたしの苦しんでいるのを見てるんだろ。あんたはどちりの天才だったからね、そうやってニタニタしてるうちに自分の出番とち

って出られなくなつちまつてるんだろ！あんたはいなくなつてないよ、死んでないよ、人生を、まだまだ失つてないよ。だから、この芝居に出てきておくれ！

淘汰 俺はここにいる！（寸発入れず食い気味に舞台袖から声がする）

大きく海鳴りの音。しばらくの静寂。

銀子 ……淘汰？

淘汰 俺は、ここにいます！

銀子 （にわかには喜んで）だけど、どこにいるんだい。声だけ聞こえて、姿は見えない！

淘汰 俺は、ここにいます！

銀子 あたしはずつと探してたんだ！

淘汰 俺は、ここにいます！

銀子 どこに、どこにいるんだい！

淘汰 俺は、ここにいます！だがこの言語は、未だ記述されたことはなかった！

大きな海鳴り、一瞬の暗転。明転すると黒服を着た淘汰が銀子のしばらく後ろにいる。

銀子 （声を震わせながら）…淘汰…、淘汰、そこにいますんだね…

淘汰 ああ、俺はここにいます

銀子 ごめんね、たった一度でも「淘汰はここにいます」と言つてやらなかった…ねえ、姿を見せておくれ

淘汰 俺はここにいます、お前が舞台の上を上手から下手へ、下手から上手へ、さまよつている姿をここから見ている

銀子 じゃあ、どうして私にはあんたが見えないの？

淘汰 それは俺が今、黒服を着ているからさ。知つているだろう？芝居の鉄則…

淘汰・銀子 黒いものは見えない

淘汰 黒いものは見えない、見えないものは黒い

銀子、うろちよろして水槽を引きずりながら淘汰を探しまわるが見えない。淘汰、そんな銀子に顔を近づけたり、足を引っかけたりする。

銀子 淘汰、分かったよ。あんたは「いる」。だから私、あんたを探し続ける！

淘汰 銀河中探し回る覚悟はできたかい？この芝居が終わる前に見つけてくれ

銀子 ええ。入墨淘汰は「ここにいます」！「ここ」に「いる」のなら、絶対見つかるはずだ！

淘汰 そうだ、どこにもいないから探すんじゃない。どこかにいるから探すのだ

銀子 ああ、光が見えてきた！明日が見えてきた！（だんだん朝日のような照明）

淘汰 鯨に荒らされた海辺に、無数の言語が揺蕩つているだろう！

銀子 道が見えてきた！今までとつかえていた言語が、旗の様にたなびいて…！

（ざああつと海鳴りと光の照明）たなびいて消える！言語の海に！
あたし、きつと見つける！

その時、「キャー」という黄色い歓声とともに女たち（もうお馴染みキャーキャーガー
ルズ）が登場。銀子と淘汰、逃げるように退場。

女1 舞台に咲いた
女2 曼殊沙華
女3 あたしたち紅の
女4 紅の涙空
女1 役名は女1、女2、女3…
女2 だけど自分は忘れやしない
女3 右から○○、□□、△△、☆☆…（ここは役者の実名）
女4 海に咲いた胡蝶蘭
女たち 芝居を彩る名のない花…。およよ…（涙をぬぐって）
女1 淘汰さん、どこに行ってしまったのかしら
女2 あたし、彼のお芝居好きだったのにい
女3 「ヨッ、淘汰あ！」って合いの手入れたくなるくらい
女4 演技がではなくて、淘汰さんの演じる生き様がすばらしかったのよね
女たち ああん、淘汰さん！

夜子と白紙男が手を繋いで走ってやってくる。

女たち テっ、テゲレツのパ！（焦って）
白紙男 もうそんなことをする必要はないよ
女1 えっ
女2 教会の、神父様とシスターではなかったの？
夜子 …心配かけましたね、お前たち。もう私は「夜子」ですよ
女たち （顔を見合わせて）夜子様あ！
夜子 よしよし、よく、芝居中探し歩いてくれましたね
白紙男 僕の役名は「白紙男」だし、彼女は「夜子」。すっかり元に戻ったんです。それより、最後の挨拶に来たんだ
女3 最後の？
女4 どこへ行ってしまふの？
白紙男 どうも、あとしばらくでこの芝居は終わります。そうすると僕たち、「夜子」と「白紙男」ではなくなります。だから芝居が終わる前に、どこかへ逃げ出すんです
夜子 せっかく見つけた、私の左手を持ち上げてくださった方。このまま役が終われば、もう会うことはできなくなるでしょう…
女1 愛の逃避行ってわけね
女2 やあん、ロマンチックう
女3 寂しいけれど
女4 ここでお別れなのね

白紙男 僕は名前を忘れた白紙の男だが、名前のないというのは、恐らく役名のない端役ということでしょう。台本に名前すら出てこないような、そんな役に人生を奪われてしまっていたんです。それを白紙と名付けてくださったあの方は、一体誰だったか……

夜子 (手をとって) さあ、もう案ずることはありません、まいりましょう。朝日が墮ちる前に、芝居のその先の、地平線まで！

朝日のような照明のもと、白紙男と夜子、愛の逃避行。退場。

女たち (手を振って) さようならあ〜！

覗き男 (走ってやってきて) 銀子ちゃん！銀子ちゃん！

女1 次から次へと騒がしいですこと

覗き男 あっ、かしまし娘。銀子ちゃん見ませんでした？今度は銀子ちゃんがいなくなつた！

女2 さあ、知りません

女3 つーん！

覗き男 まっ、生意気な。いいですか、こつちはあんたちの大好きな淘汰さんを、血眼になつて探してるんだ

女4 見つかった？

女たち (期待して) 見つかった？

覗き男 いいえ、手がかりも何ありません！

女たち (覗き男に絡みついて) ああん、淘汰さあんつ！

すると突如大音量の海鳴りの音とともに、豪快な水しぶきの音！(本物の水しぶきが可能ならなおよいのに！) 小さな木船に銚子を持って乗つた銀子が現れる。女たち、キヤー！と言いながら退場。

覗き男 銀子ちゃん！一体何してんですか！

銀子 (水しぶきの音に負けじと身を乗り出して) 決まってるじゃないの！私ずっと不思議だったのよ。どうして鯨である淘汰を探しに行くのに、刃刺しの私が船に乗らないのかつて！だって鯨は海にいるでしょ！そしたら、こう、鯨をしとめるには船に乗らなきゃいけないんだよ！ねえ見て、この船大きく揺れてるでしょ！あたしの体も、大きく揺れてるでしょ！もんのすごく海が荒れてんの！トタン板の上なのにあたし酔っちまいそうなんだけど、一生懸命吐くのこらえてんだ！覗き魔！客席からじゃ見えやしない、芝居の裏を見せてやる。来い！

覗き男 銀子ちゃん！よし来た！

銀子の乗っている船は、荒れ狂う波に揺られている。覗き男、船に乗りこむ。

銀子 市岡銀子、刃刺しの女首領、孤島の人魚、この3つを演じて血が沸き立っています。ついにほら、月夜に照り映えるウロコが生えてきました。本来の私を忘れて魚になつちまう前に、鯨に銚子立ててやる。淘汰、あんたの願い通りさ

覗き男 さあ、この芝居の主人公様、入墨淘汰を釣りに行きますよ！

銀子 (朝日のような照明がさして) さあ、神殺しだ！文学に背いた、肉体の叛乱軍があたし

らだ！天より引き下ろして漕いでまでゆく！サメでもなんでもいらっしやい。それでもこの舞台を、まっすぐ前を見て、さあ、さあ！さあ、出航だ！鯨漁へ、出航だ！槍刺せ、刃刺せ、尾鰭出せ！どんどか荒鳴れ！どんどか海鳴れ！みんな前向け！帆、あげろ！

船の後ろに大きな帆があがる。そこには鯨の絵とともに『入墨淘汰』の文字。銀子、銚をかまえ、力強くポーズをとって見せる。
銚を構えた女たちがあちこちから登場する。

女1 (力強く) 銚刺せ、刃刺せ、尾びれ出せ

女2 お前の親鯨(おやほ)にやヒレがない！

女3 どんどか荒鳴れ、俺りゃあ刃刺し

女4 どんどか海鳴れ、勢子采上げろ

女たち あれは刃刺しよ、海渡る！

水しぶき(の音) だんだん弱くなる。暗転。

終幕 最終決戦、大海戦

雷鳴とフラッシュ照明と同時に明転。海鳴りの音とともに衣装女、照明女、大道具男、美術男、音響女の乗る海賊船（ハリボテでよい）が登場する。

照明女 俺のここまでの何万光年という人生とセリフとが、のぞいてくる奴らに曇りガラスをかけているのさ（淘汰の真似をして、以降同じように）

道具男 または

美術男 やいやいやいやいやい、誰だい、俺のなにがしをのぞこうとした奴は

音響女 大きく言うと

衣装女 この海をざっぱんと音を立てて渡る入墨鯨に

美術男 しかし

道具男 潰れちまったんだと、水族館！

音響女 だけれども

照明女 俺は運の悪い奴が大嫌いなんだ

美術男 それでもやはり

照明女 蜃気楼の食べ過ぎで、お腹が苦しいのです

音響女 誰が何と言おうと

衣装女 文学鮫は水族館へ、芝居鯨は水槽へ

美術男 声を揃えて

全員 俺は運の悪い奴が大嫌いなんだ

衣装女 もう一度

全員 俺は運の悪い奴が大嫌いなんだ

衣装女 （手を叩いて）：はい、あらかたオツケーですよ

照明女 これでいつでも、主人公の座を奪えますよ！

道具男 消えた淘汰の代りに俺らが務めるんだ（全員笑う）

小舟の銀子たちは肩透かしをくらって

覗き男 な、なんですあんたたち

衣装女 ホホホ、愉快ねその小さな船！私たちもね、鯨漁に来たのよ！

音響女 私たちも漁に混ぜて頂戴な

銀子 え、いやだよお

衣装女 いいじゃないの、私たちいつも裏方なのだから

音響女 脚本家がいらないのなら主人になるチャンスもあるのだと思って

道具男 裏方だって舞台にでれるはずさ

照明女 淘汰を狩り捕って、私たち裏方がこの劇の主人になってかわるんですよ

音響女 どうですどうです、我々は

美術男 泣く子も黙る裏方一族ですよお

銀子 ぐぬぬ、いいわ。正々堂々勝負だよ！

道具男 そういや銀子、お前どうして淘汰を捕まえてどうすんだよ

照明女 どうですよお、愛しの淘汰さんでしょう？

銀子 愛しのは余計じゃ！あたし、淘汰と約束したんだ。「もし芝居に自分を忘れてしまったなら、ウロコを星にかざして、俺に銛立ててくれ」って。「銀子、お前にしか頼めない、人魚のウロコ生やした刃刺しの女首領のお前にしか」って！

覗き男 ね、銀子ちゃん、淘汰さんに出会って生き生きしてる！

銀子 もうあんたは黙ってな。淘汰を救い神を殺しに来た私たちと、芝居の主人公を狙うあんたたち、相違はあるが負けちゃいけないよ

衣装女 望むところだわ。望むところだよ！（笑う）

銀子 ところで、鯨はまだ見つからないのかい

美術男 鯨どころか、魚一匹いねえぜ

音響女 この辺りは鯨に食い荒らされたんだ

覗き男 北斗七星を頼りにしているけど、この海はとても広くて、途中でごみにぶつかったり岩にぶつかったりして、困難を極めています。でも、なんだか見えてきた。…あれは、なんだ。遠くに島？いや、違う。のらりくらりだが移動している。しかも黒い！

激しい雷鳴とともに、フラッシュ。淘汰が舞台に登場している。立派な入墨が見える。

その姿はまるで野生の鯨である。（ロイ・フラーのような華やかさもある）大きな海鳴りと雷鳴が響く。船、大きく揺れる。

全員 入墨淘汰！

衣装女 出た！入墨鯨だ！

覗き男 こりゃあ、随分立派な鯨ですな！

銀子 おお、海が荒れる荒れる…（後ろを向いて）おえええええ！

覗き男 銀子ちゃん大丈夫かい！

銀子 おえええ、酔っちゃまった、酔っちゃまったよお、あたし

覗き男 銀子ちゃん、これ！（船の中から大きな尾鰭を取り出して）

銀子 なんだい、小魚捕まえてる暇ないんだよ

覗き男 ちがうよ、これ、銀子ちゃんの尾鰭だよ！人魚の役になりかけてるんだ！

銀子 （白目をむきボタンと倒れる）

覗き男 しっかりい！

衣装女 刃刺し役がなんとも頼りないわね

道具男 こちら側が行っちゃいましたよう！

裏方の船が舞台上を移動する。海鳴りの音は相変わらず。

美術男 おいら行きます！

照明女 行っけ行っけ！

衣装女 ひけとるんじゃないわよ！

美術男、銚を持って船から飛び降りる。淘汰と睨み合っているが、腰が引けている。

美術男

やい、淘汰！俺はこの舞台で黒服と美術男、あと、えーと…ええい、とにかく役者だ！セリフの量じゃ負けるが、情熱じゃお前に負けない。さあさあ、対等に勝負だ！

淘汰と睨み合っていたが、大音量の海鳴りとともにストロボがチカチカと点滅。美術男と淘汰が戦っている。そして美術男のうめき声で終了する。

美術男

だめだ、結構強い。刃を刺そうとしても、海が荒れるもんで、俺も海の中に持ってかれちまうんだ

衣装女

あんたにや所詮無理だったんだ、この劇の主人になろうなんざ。銚の飛ばし方から学んで来い！

美術男

（船に乗り込んで）ふう、危なかった

銀子

お前ら、命かけてんだ。淘汰を狩ろうとしているのはこっちにもいるんだ。でも船が、船が波にもまれてでうまく鯨に近づけない！

照明女

呆れた！今度は私が行きますよ！

照明女、今度は船の上から強い照明を淘汰に当てる。淘汰、少しふらつく。

照明女

魚は光に弱いって聞きました

美術男

光に集まるんじゃないか？

道具男

さんまは光を避けるって聞いたぞ

音響女

その実、光のある方へ向かうんだって

衣装女

役者も同じです。照明がなくなっちゃあ暗くて芝居も何も見えやしない。役者だって暗闇に照明当てられたら、そっちの方へ向かって泳ぐに決まってるさ！

道具男

では俺は網の準備だ

銀子

あつ、ずるい。そうやって作戦練りやがって

衣装女

チームワークです。芝居だって、個々人の協力なしには出来上がらないのと一緒…

覗き男

なるほど、それはひとつの作戦だ

大道具男が網を持つ。照明清転。照明女の照らす光だけが舞台を照らしている。淘汰は見当たらない。

音響女

鯨は見つからないのかい

照明女

海の下にでもぐってしまっただんでしようか、見当たりません

道具男

きつとト書きの下に隠れてるんだ。奴からセリフを引き出すんだ！

すると雷鳴と海鳴り。銀子たちのいる方へ照明を向けるとそこには目を見開いた淘汰。次にはどこかへ消えている。

銀子 いた！淘汰！おえええ！

覗き男 揺れます！船が揺れます！

衣装女 (水かかりながら) あっただよ！網かけるんだ！

銀子 ばか！こっちに網かけたらあたしらまで釣れちまうよお！

衣装女 後から取り除けばいいもの

銀子 網の中であたしら鯨に喰われちまうってことだよ！

衣装女 それなら主人の座もヒロインの座も私らが奪えるってことでおさらよいわ

銀子 血も涙もないんだから！

覗き男 こんなことなら人魚に喰われたかったよ

音響女 そんなこともあったかしら

道具男 海に揺られすぎて

音響女 幻想でも見てるんじゃないか

銀子 あたしは銀子、市岡銀子。舞台の上でだってそれは変わりやしないんだ

覗き男 しっかり！

さらに船が揺れ雷鳴と大きな海鳴り。

銀子 幻想じゃないよ、いつもとつかかえてたんだ。あたしらはこんな、マストも指標もな

い荒れた海の中で芝居して。聞こえるのは淘汰のあたしを呼ぶ声ばかり…その声を頼りに暗闇の中を手探り潜りしながら、ここまで船動かして来たんだよ。こんな真っ暗で36
荒海でなんも見えなくて、狭い足場は悪いわの中で命削って芝居してんだ。こんなに削って削って、胸までこんなに削れちまって

覗き男 銀子ちゃん、そんなこと全然ないよ。銀子ちゃんは魅力的だよ

銀子 文学じゃない、芝居をやるためにここにいるんだ。水族館じゃだめだったんだ。この銚
で突き刺すのは、神かお前か、作者か演者か、どちらが先か。水槽の透明板を破って、
こうして海に船こぎつけて、そうして削れたものがようやく輝くんのだ。あたしの腰につ
つかかっていた水槽が、こんなボロっついけど船になって海になって帰ってきたんだ！

同時に大道具男が銀子の船に網をかける。鯨の咆哮が響く。銀子、網にかかった状態で立ち上がり

覗き男 くそう、とうとう網かけやがった

銀子 (静かに語りかける) あたしはいつか、空白だけが人生だとお前に言いました。しかし

この世に本当の空白なんて存在しません。空虚も空間も、元々はそこにあつた物体が取り除かれただけのことなのです。役者というのは、埋まっていた人生が他人の人生のために取り除かれ、空白になってしまった生き物なのです…。淘汰！覚えてるかい、今この海には艦押も執刀も、取付もない。脚本家も演出家もない。誰もが行き先や自分の人生を忘れてしまふような世界に、お前はこう言っていた。「体に入墨を掘ること、荒れた海や空白の人生の中で自分自身を見つける指標になるのさ」って。その空白を取

り戻せるか、お前に。その人生を、自分に戻せるか、入墨淘汰よ。お前の入墨はなんのためだい。あたしは銀子、刃刺しの銀子！もう孤島の人魚なんかじゃない。淘汰、あたしを見ろ！

すると網を豪快に破って銀子が銚をかかげる。照明が銀子を照らす。銀子、おもむろに上半身の服をはだぐ。すると背中に大きく【入墨淘汰】の刺青が！

銀子 あたしはこの芝居を忘れない！忘れるもんか！どうだい、この指標は！荒海に構えた一つの灯台。黒幕に浮かぶ、夜空の北斗七星だろう！

雷鳴。暗転からの、青く照明輝く。淘汰網をくぐって立ち上がる。

淘汰 銀子：！銀子！

銀子 この入墨は、海をも渡るんだよ。思い出したかい？他人を演じ続けて、劇場に奪われてしまった、本当の自分の人生

淘汰 銀子お：なんだい、なんで、こんな荒海に：

銀子 あんたを探していたんです。ほら（腕を見せて）言う通り、人魚の鱗を星にかざして：

淘汰 あたしだってできれば穏やかな海がよかったけど。この芝居はそうもいかないみたいなんだか、お前の声が聞こえないんだ。海鳴りの暴力的な音が耳に詰まって：

銀子 あたしはいます。「ここにいます」よお（支えて）あんた、やっぱり臆病もんだ

37

銀子 いいえ、あたしに役者としての生き方を輝かせてくれました。お前に救われました。生きていたいと思いました。大した役者です

淘汰 しばらく、深海の海溝に意識を揺られているような時間が続いた。他人を演じ続けて、自分だけの人生が入墨の下に隠れて見えなくなっていたんだ。でも、もう思い出したよ。俺は淘汰。そんで、この芝居は『入墨淘汰』

銀子 そうです。そうですよお

淘汰 これからするのは

銀子 （銚を勇ましく掲げて）：神殺しです！我々は役者の肉体の、叛乱軍なのです！

淘汰 （目が正気を取り戻して）やっぱり銀子、あんたは勇ましい女首領だ

覗き男 淘汰さん！やっと大海戦らしくなってきた

衣装女 ま、主人公が目覚ましてしまった

照明女 もう少しで私たちが主人公になれたのにい

道具男 俺たちやお役御免かよ

覗き男 ではあんたたちも手伝いなさいな

音響女 でも刃刺しがこんな多くっちゃあ

美術女 銚を投げる役は？

道具男 誰がやろうか？

男 それなら俺がやろう！

一人の男が怪しげに登場。ボロボロの黒マントを羽織り顔が見えない

淘汰 …ああ、あんたのお出ましかい。いつかこうして出会えると思ってたさ

銀子 (銚を構えて) 誰だい!

贗作男 覚えているかい。(ドン、と足を踏み鳴らしマントを翻して) やあやあ、俺は贗作男! みなさんどうも! 第一幕ぶりです。どうやら俺がハケ忘れた銚が、よう、銀子さん、こんなに役立ってるみたいじゃないか!

大声でガラガラと笑う。それをかき消すような激しい大音量の雷鳴。激しい点滅。

照明女 や、あいつは

道具男 どうやら面倒ごとになる前に退散するが

音響女 主人の座を狙う裏方一族はこれからも

美術男 いつでも芝居の裏にいるからよ!

衣装女 さあ、お前たち、芝居もいよいよクライマックス。退散だよ!

笑いながら船退場。贗作男、学生帽をかぶりきつくにらみつける。点滅やむ。

贗作男 俺は偽物肉体の贗作男。芝居に自分の人生、自分の本当の肉体を奪われ、こうやって偽物になっちまった男だ! そしてこの目を見る。昔、刃刺しの男にあげたんだ。だから俺は真つ暗くら! 劇場の暗転よりも真つ暗な男だ!

38

銀子 確かに銚をハケようとするお前のその手を止め、私は刃刺しになれたんだ。もうこの芝居には、銚を掲げた勇ましい刃刺しが何人という。そして、芝居の主人の首を狙っているのさ!

贗作男 楽屋で一人いつ来るかもわからぬ出番を待っているのは飽き飽きたんだ。俺がこの芝居を作る。どうやら都合よく台本は破れてしまった。ここから先の『入墨淘汰』は俺が作るんだ!

覗き男 (魚とり網棒をかついで) それなら僕と勝負ですぜ!

贗作男 お前は誰だ

覗き男 はい、僕です

贗作男 なんだい、お前かい

覗き男 はい、僕です

贗作男 なんてことはもう飽き飽きたんだ。どこのどいつか、どどいつか、そっだからことはもうナシだ

淘汰 お前! そんなもので勝てるもんか!

銀子 あたしがやるよ、だから船に上がってこい!

覗き男 本当のハケ担当は僕です。第二幕で言ったでしょう。覗き魔の僕がハケ忘れたんです!

贗作男 いいや、俺があつた銚をハケ忘れたんだ。観客のお前が、芝居にこれ以上干渉するな。芝居は神の手に引き渡される!

覗き男 最後の最後でいいとこ持ってきやがって、これ以上何が欲しいんですか

贗作男 芝居の主人、神の座！
覗き男 勝負！

ストロボ激しく点滅。魚とり網棒と銚で激しく殺陣。すると

覗き男 うっ！（苦しむ）

淘汰・銀子 大丈夫か！

覗き男 足を踏まれました…（ビターんと倒れる）

淘汰 今行くからな！（船から降りて）

贗作男 嘘だろ

銀子 点滅中は危ないからゆっくり動けど、あれほど言ったのに！

淘汰 おい、大丈夫か！（介抱して）

覗き男 僕、もうだめみたいですよ…

淘汰 もうだめなのか？

覗き男 はい、役に立てなくてごめんなさい…

銀子 おい、しっかりしろ！

贗作男 ごめんで…

淘汰 死ぬんじゃない、死ぬんじゃないよ。観客が、舞台の上で死んじゃいけないんだ。地平線の向こうに、落ちていかなければならなくなるんだ！

銀子 あんた、想像力の問題だと言ったじゃないのよさ！

淘汰 そうだ、舞台は海。（客席を指さし）見ろ…。何人という疲れた顔をした人間が雛壇型³⁹に列を成し、こちらを見つめている。お前が死んだあと落ちてゆくのはあちら側だ

覗き男 僕はね、たくさんの芝居や人生を覗いてきました…。人生の傍観者です。この芝居にお

ける唯一の第三者です。だけどね、自分の人生だけは怖くて覗けなかったんです。でも

こうなるんだったら、覗いとけばよかったなあ

贗作男 ちよつと、踏んだだけだ…（バツが悪そうに）

銀子 あんたは黙ってな！

淘汰 俺の人生だけは覗けないと言っていたな

覗き男 ええ、でも、もういいんです。淘汰さん、あなたの人生は覗くものじゃない。元から、そこに誇示されてあったものなんだ！そして今、あなた自身の人生をこの芝居で演じて

それがもつと輝いている…。（目をつぶって）星が見えます

淘汰 そうさ、見えるかい。俺の入墨が

覗き男 見えますよ、目をつぶっているけど、見えます。その入墨は、肉体や人生を自分だけの所有物にしてしまう。あなた自身の指標でもあるし、海の上に浮かんだらそれは北斗七星なんだ

星なんだ

淘汰 そうか、見えるのか。海の北極星が、閉じているお前の目にも見えるのかい…

覗き男 観客の僕を、海に連れ出してくれたこと、光栄に思います。では、そろそろ行かねばな

りません…（起き上って舞台から降りる）

銀子 あんたあ、本当に行っちゃうのね…（涙ながらに）

力なく、客席を歩いて出口に向かう。

覗き男 (観客たちに向かって) いいですか、次に舞台の上に打ち上げられるのは、あなた、あなた、あなた、百万人のあなたたちかもしれない。いつまでも椅子に腰を下ろして第三者でいられないかもしれない。いいですか、僕は、いつかのあなたたちの姿だ。それじゃあ、また！

大きな波の音。

贗作男 ふふふ、海での闘いは海で蹴りを付けなきゃいけないのと同じように、芝居の中の闘いは、芝居の中で決着を付けなくてはならない！

鯨の吠える音と、一気に青くなる照明。海底に浮かぶ星のイメージ。銀子と淘汰、たたみかけるように

淘汰 海は荒海、母鯨は死んだ子鯨の恩讐に駆られ
銀子 星の降る夜でした
淘汰 月に向かって吠えるのさ。子を返せ、海を返せと
銀子 かけずり回って涙を売って
淘汰 次来た刃刺しにや血を見せずにはおられまいと
銀子 歴史は南に、仏は右に
淘汰 月に向かって吠えるのさ
銀子 オレンジ片手に風なびかせて
淘汰 そうしてまんまとやってきた刃刺したち
銀子 聞かせてください、あたしの言葉を
淘汰 長靴揃えて子包丁もって
銀子 あたしの言葉は文学ではありません
淘汰 おーい！座頭まであと二十間！
銀子 あたしの言葉は波で、言語がカモメとなって海を渡ります
淘汰 鯨の手羽(てっぱ)が海面をたたくと
銀子 あたしの肉体は海底の貝殻で
淘汰 顔こわばる刃刺したちにも血がたぎり
銀子 ほとばしる血脈は海溝の活火山
淘汰 月夜の大海に母鯨と男たちの闘いだ
銀子 いいえ、難しい話ではないのよ
淘汰 そうだ、難しい話ではないんだ
銀子 例え話でも、おとぎ話でもありません
淘汰 古い鯨に若鯨、どちらの血が新しいか
銀子 劇場は海だということをお伝えしたいのです
淘汰 俺の手が劇場をたたくと(床を叩く)

銀子 海も大きく荒れる！

淘汰 ああ見えてきた！子供を殺された

銀子 荒れ狂った座頭が！

淘汰 仲間を殺された

銀子 瀕死の抹香が！

鯨の大きな鳴き声。雷鳴。銀子、船に戻る。贗作男、淘汰、睨み合つて

贗作男 お前にはわかるまい。出番もなく楽屋で過ごしている役者のむなしさを。台本に書いてあるセリフがえら呼吸とともに薄く吐き出される恐怖を。演出される人生を。ドラマツルギーは思想か？ならば思想を持てるのは脚本家のみだ。だから俺が、この芝居を作り替えるんだ！

淘汰 わかるさ、俺もつい今まで名前も肉体も忘れ、自分の人生を台本にとられていた。だが自分だけが、自分の主人になるために、ここへ戻ってきたんだ！

贗作男 俺は下男だ。肉体を失った、偽物の人生の下男だ！だが、鮫―サメ―ならば…例えば俺を鮫だとしたら…そうだ。この主人公の鯨を殺し、起承転結を牛耳る。芝居の主人になるためにこの時を待っていたのだ！

淘汰 全てを破り捨て、起承転結から逃げ出すんだ。世界はお前の余白だ！そうしたら俺が、世界の余白の隅っこにお前の肉体を見つけてやる。お前の本当の肉体を書いてやるさそんなこと、できるわけがない

淘汰 文学ではない、肉体の芝居をしている俺たちに光はあるはずだ。芝居は作者がいるだけ41では駄目なんだ、お前がいなけりゃー！

贗作男 なんだかよ、お前の声が聞こえないんだ。海鳴りの音がうるさいんだ。ああ淘汰、残念だ。(少し不振に微笑んで) おれは次にどう動かなきゃならないか、生まれた時から決められていたように思う

淘汰 …どう動く！

贗作男 さあ！

淘汰 どう動く！

贗作男 さあ！

淘汰 さあ！

贗作男 (声色を変え)「あはれ贗作男、自分の人生を他人に取られてしまった！一昨日演じたのは銀行屋、昨日演じたのは医者のおぼんくら息子、今日演じるのは、主人殺しの大悪党だ！目をかっと思開き大立ち回り、客席へ見栄をきってどつと一つ構える！肉体信奉の背文学男をギロリとにらみつけ、今宵は目に物見せんものかと盲(めくら)鮫、強く高くないなないて、入墨鯨の腹に襲い掛かる！」

淘汰にとびかかる。淘汰くらう。台本を取り出した淘汰。それを阻止するように攻撃を続ける贗作男。海の荒れた波の音が暴力的に舞台を襲う。(水が嵐のように舞台へ、客席へ襲い掛かる…)。船が揺れる。

淘汰 台本を書き換えよう。お前がそんな不幸な泥海に身を沈めないように

贗作男 牙を剥く！水族館から逃げ出した鮫が、言語を食い散らし肉体の叛乱軍へ一直線に向かつてゆく。エイッ！

淘汰 (煽らながら淘汰、派手に転ぶ) この芝居には脚本家も演出家もない！いや、もはや永遠に必要ないだらう。照明も音響も脚本でさえ、己の内部に存在し、拡張、膨張し、続ける！お前の内部に、劇場は存在する！

贗作男 文学と芝居、作者と演者、水族館と水槽！機械のように巧妙に作者の意図を隠す俺たちに、椅子を椅子としか見せようとしないうお前たちに、明日はあるのか！

淘汰 (かなり苦戦しながら) 俺たちは機械じゃない。俺たちに、神の意図はいらなんだ！

銀子 (興奮して) 雷鳴とどろき、そこは大海戦！海は黒くうずまき、海底まで届く波のさざうねり！小魚たち、思い思いに逃げて地形までが南へ南へ、ずれるように！

淘汰 銀子！天より引きずり出された、神を殺せ！さあ、射殺せ！

贗作男 そこかあ(淘汰に突進してゆく)

銀子 船はマストが折れ、鯨の背に乗り、サメの鼻にこづかれ、縦横無尽に大海を揺らされていたが耐えきっていた。重力の無いような船には刃刺しが一人、鉾を突き立てる機会をうかがいながら血気を灯らせた顔で身を大きく震わせ鯨とサメの闘いを見ていた！

淘汰 死ね！神の名を騙る騙りめ！

海が大きく揺れる音。点滅。そこへ鯨の大きく鳴く音。

銀子 淘汰！

静寂。照明真つ青に灯り、そこには鉾を淘汰に突き刺し、血をたぎらせた目をした刃刺しの白紙男！淘汰、のけ反りながら苦悶する。血しぶきがまるで潮のよう。

銀子 淘汰！淘汰！

白紙男 やった…、やった！(客席に向かって)今度こそ酔っ払うことなく刃刺しができた！あ、目が、目が見えない…

贗作男 ああ、目が、目が見える！お前、白紙！

白紙男 (目が見えず朦朧としながら) 僕の恩人、一幕ぶりですね。脚本家のいない芝居で、僕は自由に役を変えてこうして刃刺し役であんたを助けることができた。本当はあのまま愛の逃避行とシャレ込みたかったんですが、目玉の恩は返させてください。あんたもきつと思ひ出します。自分の肉体、思い出しますよ。…う…波が、僕を飲み込んで…波に流される…(どんどん流されてはける)

贗作男 …白紙！今行くからな！白紙！白紙！(水にまみれた台本を拾い、よろめきながら追う。ああ、白紙！今、行くからな！俺は鮫なんだ。今こうして(学生帽をとり)鮫の役やっていた。だからお前を助けるなんざ、任せとけてんだ。任せとけてんだ…。そんでお前、鮫の背中に乗ったらば、余白を見るんだ！また目玉交換してやるから、交代ばんで世界を見るんだ。ああ、あの日映画館で灯したあの光を目指して、俺はどこまで行くのだろう…。今行くからな…今行くからな…(退場)

打って変わって静かな波の音。物悲し気。銀子、淘汰を支えている。

銀子 淘汰：淘汰：なんだいそれは。入墨鯨の名が聞いて呆れるよ！

淘汰 (息苦しく) そうだな。抹香も、座頭も、長須も白長須も、こんなに弱つちい鯨は俺以外にいないだろうな…

銀子 そうだよ、あんた弱いよ。ああいうところはさ、普通のお話だとき、かつこよく決めて勝つもんだよ。そういうもんだよ…

淘汰 ハハハ：やい、市岡銀子。なんか、面白い話ないか？

銀子 ばかじゃないのさ、こんな時に面白い話なんてできるわけないだろ

淘汰 刃刺しジョークみたいなの、ないのかい

銀子 悪いが市岡銀子はつまらない女だよ

淘汰 (もうろうとして) そうかい、市岡銀子はつまらない女なのかい

銀子 言ってることが無茶苦茶だあ

淘汰 や、朝日に向かって、鯨に突き立てた銚を勇ましく高く掲げた、女捕鯨主だ。男たちはみな、お前のその勇敢なさらし姿に目奪われてんだ

銀子 艦押が艦艙をうけもち、取付という雑用の少年が脇艙をになっけていて

淘汰 その一番前で、誇らしげに血をはずませていて

銀子 まるで世界の全てを見たような目をして

淘汰 海に濡れた髪は海水を吸って青々と輝き

銀子 照れるよお

淘汰 どうだい、俺の人生は

銀子 …あんた、鯨です。立派な、鯨です。いろんな人生が見えます。いろんな他人を演じてきて、その他人をしつかり自分に組み込ませた、入墨だらけの鯨はト書きの上を悠々と泳いだかと思うと、セリフの下に潜り込み猛スピードで東を目指します。起承転結の荒波にもまれた時もありましょう。それでも、朝日とともに海面に上がってきて地平線をキッと睨み、光に向かって咆哮します…

波の音。

銀子 (振り絞るように) …私、なれるかしら

淘汰 なれるとも

銀子 私なれるかしら、何物にでも

淘汰 この芝居でだって、なったじゃないか。ビン底女に、銀子に、人魚、そして刃刺し…でもって、もし舞台が真つ暗だったら、俺の血を油にするんだ

銀子 鯨油…

淘汰 そう、俺がどんなに真つ暗な舞台でも照らしてみせるさ

銀子 お前の血は劇場を照らす

淘汰 俺の血は真つ暗な劇場を、舞台を、芝居を、役者を、人生を照らす、鯨油だ

銀子 (朝日のような照明さす) : : こんな荒々しい芝居はもうすぐ幕を閉じようとしている。そしていつかは千秋楽がくる。市岡銀子としての役を終える。そのときが来ても私、自分を忘れずいられるかしら

淘汰 いられるとも。さ、やってごらん

銀子、立ち上がり、座り込む淘汰の一步後ろで誇り高く掲げる。正面をキツとにらんで、朝焼けのような光の中で波の音がひとつ聞こえる。

淘汰 そうそう、朝日に照らされた誇り高き女捕鯨主

銀子 それでいて私としての人生を忘れず:

淘汰 その銚は鯨の急所を突いたばかりで

銀子 この次なんだっけ、なんだっけか

淘汰 こんな時にセリフ忘れるなよ

銀子 朝日がまぶしい、星の残影に目を射られる

淘汰 スポットライトってこんなにまぶしかったっけなあ

銀子 私の入墨が、クライマックスを前にうずいている

淘汰 俺の背中にもさ、あるはずだぜ『入墨淘汰』

銀子 おそろいね、おそろいの入墨だわ

淘汰 これでもう忘れない。この芝居も、客席も、他人の人生も

銀子 海へ帰るの?

淘汰 そうしようかな

銀子 海へ帰るの? (不安げに)

淘汰 入墨鯨は海へ帰るさ。芝居の中に、帰るんだ

銀子 同じ芝居の同じ痣を引っ提げて、まるで空から地平線を超えて海まで落ちていくように、ずっとこの舞台を渡っていくのね。脚本家も演出家も蹴とばして、波の声をばかり聞いていた: (気を取りなおし) さ、これが、市岡銀子最後のセリフだよ!!

銀子、銚を中くらいで勇ましく構えて中央で最後のセリフを言おうとする。

銀子 私がこのお話をするのは、これが最後でしょう。思い出して下さい、思い出せるなら。星の降る夜でした。かけずりまわって涙を売って、歴史は南に、仏は右に。オレンジ左手に風なびかせて、きかせてください、あたしの言葉を。いいえ、難しい話ではないのよ。例え話でも、おとぎ話でもありません。劇場は海だということを:

バツと急な暗闇。あちこちで一斉に油をひたした手持ち壇に灯りがともる。女たち銀子を取り巻き、銀子を灯りで照らす。

銀子 (急に熱く語りかけるように) 私は銀子、刃刺しの銀子。水槽を飛び出して次の芝居を探しに劇場から飛び出してゆく女です。どこかで聞きました。入墨の入った鯨の話。体は黒墨に染まって荒波にもよく見え、右脇っ腹にはいつしか射られた銚が突き刺さ

つたままで、どくどくと永遠に血が湧き出ているそうです。昔の死闘でつけられた傷なども痛々しく見え、それゆえどんな刃刺しも圧倒され近づくことはできない、そんな鯨の話を書きました……。その鯨から湧き出た血に火をつけると、こうこうと燃え上がり人生までも燃え上がるのだと、そう聞きました！

バツと青い照明つき、豪快な雰囲気とともに水しぶきがあがる（音）。
勇ましく立ち上がった淘汰が『入墨淘汰』の帆をたなびかせている。立派な入墨がよく映える。

その他の役者たち、全員黒衣となり手持ち壘と銚を持って淘汰を見つめている。銀子、後ろを振り返ろうとするが、思い直って振り返らない。そのままゆっくり足を踏みしめながら前へ突き進んでゆく。

- 女1 入墨鯨は海渡る
女2 入墨鯨は暗闇渡る
女3 星夜に浮かぶ切っ先は
女4 あれは刃刺しよ
全員 盲（めくら）の刃刺しよ！

刃刺し銀子は水槽を飛び出し、次の獲物を探しに劇場から出ていこうとする。入墨淘汰は海へ帰る、芝居の中へ帰ってゆく。

鯨の大きな鳴き声と、海の荒れた波の音でゆっくり暗転。

暗転中、一つ大きく鯨の鳴き声が聞こえる。それは入墨鯨の咆哮である。

暗闇の中に、勇敢な刃刺したちが鯨へ向かっていく姿が険に浮かぶ。

どんどかどんどか……

（了）

入墨鯨は暗闇渡る
入墨鯨は海渡る
星夜に浮かぶ切っ先は
あれは刃刺しよ
盲の刃刺しよ